



Title	職業としての「シェルパ」をめぐる語りと実践：ネパール・ソルクンブ郡P 村を事例に
Author(s)	古川, 不可知
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 119-137
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/51235">https://doi.org/10.18910/51235</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈論文〉

職業としての「シェルパ」をめぐる語りと実践  
——ネパール・ソルクンブ郡P村を事例に

古川 不可知

## 要旨

ネパール東部のソルクンブ郡はシェルパ族の居住地である。エベレストの麓にあたるこの地域はトレッキング／登山観光の一大メッカであり、観光シーズンには多くのネパール人ガイドたちが観光客を案内して山道を行き交う。様々な民族的出自を持つガイドやポーターたちは、しばしば観光客たちから「シェルパ」として言及され、ときにはまた自らも「シェルパ」を名乗って観光産業に参加している。

本稿の目的は、民族範疇とはズレを持ちつつ重なり合った「シェルパ」という職業カテゴリーが、現地においてどのように語られ、実践され、また再生産されているかを、ソルクンブ郡のある村でネパール人を対象に開校される登山学校を事例として分析することである。ここでは、シェルパ族を中心にネパール各地から集まってきた生徒たちが、米国人講師の指導のもとでアイス・クライミング（氷壁登攀）の技術を中心とした登山スキルを習得する。学校では、外国人やシェルパ族、「シェルパ」として働くシェルパ族ではない人々などによって多様な「シェルパ」の理念や枠組みが提示され、生徒たちは「山で道案内するシェルパ」となるために訓練を通して自らの生活環境を対象化してゆく。生徒たちは、「シェルパ」の概念や登山用具などのモノ、環境中に道を作りだす実践などを通して職業としての「シェルパ」へと成型されてゆくのである。

## キーワード

ネパール、シェルパ、エベレスト、登山、トレッキング

## 1. はじめに

本稿の目的は、ネパール東部のソルクンブ郡(Solukhumbu)において、職業としての「シェルパ」がどのように語られ、実践され、再生産されてゆくかを、あるシェルパ族の村とその村で開校される登山学校を事例に考察することである。

ソルクンブ郡はシェルパ族(Sherpa)の居住地である。エベレスト（ネパール名：サガルマータ、シェルパ名：チョモランマ）の麓にあたるこの地域は、ネパールの鎖国が解かれた1950年代以降、登山・トレッキング観光の一大メッカとして発展してきた。現在では観光シーズンになると、多くのネパール人ガイドたちが主に西洋人や東アジア人からなるトレッキング客や登山客を先導して山道を行き交う。様々な民族的出自を持つガイドやポーターたちは、しばしば観光客たちから「シェルパ」として言及され、ときにはまた自ら「シェルパ」を名乗って観光産業に参加している。

従来は「民族」の名称であった「シェルパ」の語は、1953年のヒラリーとテンジン・ノルゲイ・シェ

ルパによるエベレスト初登頂によって、高地ポーターを指す一般名詞として世界的に流通するようになり、現在では広くエベレスト地域で働くガイドやポーターを指すものとしても用いられている<sup>1)</sup>。

民族と職業とがズレを持ちつつ重なり合った、この「シェルパ」という社会的カテゴリは、現地の人々の間でいかに認識されているのか、またどのようにして再生産されているのか。本稿では、アメリカの NGO によって運営される登山学校、KCC(Khumbu Climbing Center)における参与観察を通して、「シェルパ」の再生産メカニズムの一側面を示す。

この学校では、シェルパ族を中心とするネパール人たちが米国人講師の指導のもとで、エベレスト登頂に不可欠なアイス・クライミング（氷壁登攀）の技術を中心に、登山スキルを習得する。学校では、講師たちの「シェルパ」観や自然観に基づいた教育がなされ、生徒たちには従来の生活環境や自己を対象化してゆくことが求められる。本稿では、多様な立場から提示される「シェルパ」の枠組みと、そのイメージに沿って環境を対象化して山中に道を作りだす実践に焦点を絞って考察する。そして生徒たちは、交渉される複数の「シェルパ」概念や、登山用具などのモノ、登攀の実践などが絡みあう中で「シェルパ」として成型され、再生産されてゆくことを示す。

## 2. 先行研究

本章ではシェルパ族についての先行研究を概観する。

シェルパ族については、これまで数多くの研究がなされてきた[e.g. Fürer-Haimendorf 1964, 1975, 1984; Ortner 1978, 1989, 1999]。それらにおいては、とりわけシェルパ族の観光産業への移行に伴う社会変化が論じられてきた[Fisher 1990; Brower 1991; Stevens 1993]。特に本稿と関わる論点として、「勇敢で従順」といったシェルパ・イメージの成立についてもいくつかの議論がなされている[Adams 1997; 鹿野 2001]。また他の民族がシェルパを名乗る「シェルパ化」現象については、フィッシャーはタマンをはじめとする他の民族が観光客の前でシェルパに「なりすます」事例を紹介し[Fisher 1990:137]、鹿野はネパールのセンサスを分析して、民族誌的には他民族とされる人々が所属カーストとしてシェルパを選択する傾向を指摘している[鹿野 1999]。ただしこれらの議論が対象とするのは、あくまでもシェルパ族であった。本稿では、「シェルパ」を名乗る様々な出自の人々を対等に視野に収めつつ、職業としての「シェルパ」というカテゴリについて分析を試みる。

ネパールにおいては、カーストと民族の双方を意味内容とするジャート(jat)が社会的集団区分の単位となっている。これは、そもそも職業集団の階層であったカースト制度のなかに、ネパールの拡大に伴ってシェルパ族など非ヒンドウの民族集団もまた取り込まれることで成立した[Ortner 1989: 90]。ネパールにおいては民族と職業はしばしば同一視され、商業民タカリーの事例[飯島 1982]のように時として職業が民族を生成してきた。こうしたネパールの文脈では、民族への帰属はしばしば道具的に選び取られてきたことも、多くの研究者によって指摘されている[e.g. Lim 2007]。これらの事実には照らすならば、職業としての「シェルパ」もまた、当然のこと一枚岩の同質的な集団ではありえないにせよ、ある種の実体性を持って生成し、観光産業の展開に伴った変化の過程にあるものと考えられる。

鹿野は前出論文の結論部において、集団名称の状況決定的な側面については具体的な事例の蓄積が求められると指摘していた[鹿野 1999: 77]。本稿は、登山学校というミクロな現場から民族誌的事例の一つを提供することも目的としている。

実践を通した共同性の生成についてはレイヴとウェンガーによる正統的周辺参加の議論がある[レイヴ & ウェンガー 1993]。彼女らによれば、個人は実践への全人格的な参与と学習により、次第に共同性を身につけてゆく。しかし「シェルパ」の事例が特徴的なのは民族と職業とがズレつつ重なり合う点にある。レイヴらも必ずしも明確な中心を指定するわけではないとはいえ、実践共同体の概念が求心的で安定したものに見えるのに対して、シェルパ族／「シェルパ」のケースは二つの焦点をめぐって揺動しているのである。

ハッキングは、人間の分類についての科学的な知識が分類そのものの本質となり、その本質化によって分類がまた変容するという循環的な作用をルーピング・エフェクトと呼ぶ。そして分類における個はその時点の知に基づいて過去を再編成してゆくと論じた[Hacking 1995]。後述するように「シェルパ」の事例においては、絶えず枠組み自体が組みなおされ、それに沿った形で過去も再構成される。したがって本稿では、同一の名称を持って重なり合う二つのカテゴリをめぐって交渉する様々なアクターの動態を記述すると同時に、そのカテゴリの枠組み自体が揺れ動く様相を指摘することとなる。

本稿では、既存のシェルパ研究が指摘するように、単純に西洋人とシェルパ族の二項の相互作用によって、シェルパ族が「シェルパ」としてイメージ化された[Ortner 1989; Adams 1996, 1997]とみるのではない。「シェルパ」をめぐって語り実践する人々のあいだでは、同一の名乗りの中にも差異があり、境界をめぐって交渉がなされている。さらに「シェルパ」は、「シェルパ」概念とそれを名乗る多様な民族の人々のみならず、登山用具、山の環境とそこに作りだされる道など、非人間的なアクターの関与があってはじめて生成する。以降で詳しく論じるように「シェルパ」とはいわばハイブリッド[ラトゥール 2008]なカテゴリなのである。

### 3. 調査概要

本章では調査地について述べる。第1節にて地域的な概要を略述したのち、第2節にて登山学校のカリキュラムについて記述する。

#### 3.1 ソルクンブ郡、P 村およびシェルパ族

本稿が対象とする登山学校および開催地である P 村は、ネパール東部のソルクンブ郡に所在する。領内にエベレストを抱えるソルクンブ郡は、北部のクンブ地方一帯がサガルマータ国立公園に指定されており、国立公園内部はほとんどがシェルパ族の居住地となっている。シェルパ族とは、クンブ地方を中心に居住するチベット系民族集団を指す名称である。16世紀ごろより、チベットのカム地方からヒマラヤを越えて現在のソルクンブ地方へと断続的に移住してきた人々の総称とされ[Fürer-Haimendorf 1964; Ortner 1978; 月原 1992]、ネパールのセンサス上は、人口およそ10万人とされている[Government of Nepal 2012]<sup>2)</sup>。

シェルパ族の人々は19世紀末ごろより、西洋諸国のヒマラヤ探検プロジェクトに高地ポーターとして雇用されるようになると、「勇敢で従順な山岳民族」としてイメージ化されてゆく[鹿野 2001; 根深 1998]。そして1953年にヒラリーと「シェルパ」のテンジンによるエベレスト初登頂がなされると、「シェルパ」の名前は高地ポーターを指す一般名詞として世界中に広まった。

現在、ソルクンプ郡はトレッキング観光の一大メッカとなっている。起点となる小さな飛行場ルクラからエベレスト・ベースキャンプへと至る道はトレッキング・ルートとして整備され、年間3万人を超える観光客が訪れるようになった<sup>3)</sup>。ガイドやポーターをはじめとする職を求めて他民族の人々も集まるようになり、彼らはしばしば「シェルパ」を自称している。

P村はソルクンプ郡の北部にあたるクンプ地方、国立公園内の標高3800mの地点に位置する。およそ90戸400人が居住しており、住民は2軒のライ族の商店を除いてすべてシェルパ族である。川の合流点にせり出した断崖の上に住居が散在し、村内には段々畑が広がる。ジャガイモとシコクビエが自家消費用に栽培されるほか、ビニールハウスでごく少量の青菜なども栽培されている。村では600頭を超えるヤクが飼育されており、かつてはチベット交易とヤクの飼養、出稼ぎによって生計を立ててきたと語られる。クンプ地方の観光地化が進んだ現在、村には10軒の小規模なロッジがある。しかし村は主要なトレッキング・ルートから徒歩で30分から1時間ほど離れた場所に位置するため、村そのものはそれほど観光地化せず、男性たちは主に登山やトレッキングの仕事によって生計を立てるようになった。村内には現在、およそ50人のエベレスト登頂者が居住している。このP村では2003年以来、毎年1月末にアメリカのNGOによってKCCと呼ばれる登山学校が開校されている。

筆者は、P村およびクンプ地方において、2013年1月から2014年9月にかけて断続的に通算1年3か月にわたって調査をおこなった。本稿が特に対象とする登山学校では、2013年1月19日から2月1日および2014年1月19日から2014年2月1日の二回、参与観察をおこなっている。一年目は一つの班に随行して全行程の観察を、二年目はインタビュー中心の調査を実施した。よって訓練の概要および観察の記述は特に断りの無い限り2013年のデータである。インタビューの記録については兩年のものをを用いる。調査には原則としてネパール語を用い、必要に応じて英語を併用した。

### 3.2 Khumbu Climbing Center

本節ではKCCの参加者とカリキュラムについて述べる。KCC(Khumbu Climbing Center)は、アメリカのNGOであるALCF(Alex Lowe Charitable Foundation)によって運営される登山学校である。2003年に開始されたこのプロジェクトは、「コミュニティ・ベースの支援的なプログラムに基づいて、信頼のおける登山訓練を推進することによって、ネパール人の登山家と高地労働者の安全の余地を増加させる」ことが目指され<sup>4)</sup>、とりわけエベレスト登頂に不可欠なアイス・クライミング(氷壁登攀)の技術を教授することを目的としている。毎年ソルクンプ郡P村でネパール人を対象に、周辺の滝が氷結する1月末の二週間にわたって開校されている。参加費は2000ルピーと格安<sup>5)</sup>であり、クランボンやハーネスなど必要な用具はすべて貸出可能となっている。

2013年は、10人ほどのアメリカ人講師（ネパール語でイングリッシュ・ドクトルと呼ばれる）と18人のネパール人インストラクターのもと、81名の生徒が訓練に参加していた。生徒の内訳はシェルバ族が62名（うち女性2名）、マガルとライがそれぞれ4名、グルンとタマンが2名ずつ、バウン1名、チェットリ2名、ラマ姓のもの2名、パキスタン人のゲストが2名であった<sup>6)</sup>。また生徒の平均年齢は、26.6歳であった。出身地はソルクンブ郡を中心にネパール各地にわたる。

参加者たちは、村内のロッジに分宿してトレーニングに参加する。メンバーは経験者を対象とする2つのアドバンスドコースを含めて10の班に編成されていた。各班には、正副二名のネパール人インストラクターが付き、クライミングの直接指導のほか、雑事全般の面倒を見る。アメリカ人講師たちは交代で各班をまわり、指導をおこなっていた。

2013年の調査では、主に第4班に随行して観察をおこなった。全員がKCCに初参加であったこと、班員の二名が筆者と同じロッジに宿泊していたこと等を考慮して決定した。表1は第4班のメンバーについて、年齢と民族、使用可能言語、参加理由を一覧にしたものである。

表1：メンバー表（第4班）

名前	年齢	民族	使用可能言語 (除ネパール語・シェルバ語)	参加理由
F	28	シェルバ	英語	エベレストに登るため
LL	29	シェルバ	英語・ヒンディ語	クライミング・ガイドになるため。 弟がエベレスト登頂者だから。
De	30	シェルバ	英語・ヒンディ語・アラビア語	クライミング・ガイドになるため
Te	31	シェルバ	英語・マレーシア語(マレー・タミル・中国)	クライミング・ガイドになるため エベレストに登るため
P	24	タマン	タマン語・英語・ヒンディ語・日本語	エベレストに登るため。 オジがエベレスト登頂者だから。
Ts	19	シェルバ	英語	クライミング・ガイドになるため エベレストに登るため
Do	29	シェルバ	英語・イタリア語・日本語	クライミング・ガイドになるため
MC	21	シェルバ	英語	エベレストに登るため 父親がエベレスト登頂者だから

言語については自己申告に基づいており、筆者の見たところその実際の運用能力は、かろうじて意思疎通の可能なレベルから流暢なものまでかなりの差がある<sup>7)</sup>。職業は全員が自分をトレッキング・ガイドであると語っていた。

従来の研究が指摘するところでは、シェルバ族の人々はかつて金のために登山をしていたが、次第に名誉のためへと変わってきたという[Ortner 1997; Adams 1996:208]。筆者の聞き取りをもとに単純化したメンバーの参加理由では、お金を目的とした「クライミング・ガイドになるため」と、名誉が目的と理解できる「エベレストに登るため」は拮抗していた。加えて、第三の理由として「親族がエベレスト登頂者であるため」という説明もなされている。エベレストをどのように認識するかには出身地の影響も大きく、登山によって裕福になったクンブ地方出身のシェルバ族たちはエベレスト登山を通過儀礼的にとらえる一方、低地のソル地方などからやってきた人々はエベレストと金銭収入を大きく結びつけて語る傾向がある。ともあれKCCへと参加しているのは、トレッキング・ガイドのうち上昇志向の強い部類の人々であると言える。



次にKCCのカリキュラムについて述べる。二週間のトレーニングの全体スケジュールは表2の通りである。最初の二日間はオリエンテーションに充てられる。初日には開校式がおこなわれ、2日目は村内でザイルの結び方やハーネス、アイゼン、カラビナといった登山用具の基本的な使用方法を学ぶ。本格的なトレーニングが開始されるのは3日目からとなる。この日にはトレーニングの安全を祈願するため、村のラマ（仏僧）とともにチベット仏教式のプジャ（祈願）がおこなわれる。そののち、各班に分かれてそれぞれ日毎に割り当てられた滝に向かい、トレーニングが開始される。翌日からは一日の休日ははさんで、アイス・クライミングやロック・クライミング、あるいは講義を受ける。表2は全体のスケジュールである。

表2：全体スケジュール（第4班の事例）

日	トレーニング	英会話のテーマ	講義のテーマ
1/19	オリエンテーション		
1/20	ロープワーク	登山用具	Mountain Environment
1/21	プジャ、 アイス・クライミング	骨	—
1/22	アイス・クライミング	鳥	Khurpa Care
1/23	ロック・クライミング	身体部位	—
1/24	アイス・クライミング	地理	LNT/Stewardship
1/25	医学	地図	
1/26	休憩日		
1/27	アイス・クライミング	氷河	Avalanche Awareness
1/28	地理学	鳥	—
1/29	ロック・クライミング	国	Rescue Scenarios
1/30	アイス・クライミング	山の風景	—
1/31	卒業試験		
2/1	卒業式		

アイス・クライミングは、班ごとに定められた二人のネパール人インストラクターと、日替わりで各班を回るアメリカ人一名の指導のもとおこなわれる。村から約一時間をかけて谷を渡り、山腹に点在する滝場へ到着すると、ネパール人インストラクターがフィックスト・ロープを張る等の準備を開始し、その間アメリカ人インストラクターがロープワークなどを指導する。準備が完了すると、生徒はクライマーとビレイ（クライマーの落下時にザイルを引いて確保する役）に分かれて登攀を開始する（図1）。登攀中は基本的に下からインストラクターが取るべきルートや手足の使い方を指示する。言語は、アメリカ人は英語で、ネパール人インストラクターは主にネパール語を用いていた。一度の登攀から降下までおおむね30分程度かかり、全員が2回ほど登ったところで昼休みとなる。登攀の時間は習熟につれて減少するため、回数は後半になるほど増加してゆく。日によってはアンカーの作り方などに重点を置いたトレーニングがおこなわれる。

図1：トレーニング（アイス・クライミング）の風景



昼食時には山腹の開けた場所に炊き出しのテントが張られ、お茶とインスタントラーメンやカレーが日替わりで提供される。午後も同様に数回の登攀をおこなったのち、用具を片づけて村へと戻る。

「この学校が目指しているのは単なるクライマーの養成ではなく、ガイドをつくることだ」という説明は、講師たちからしばしば聞かれる。それを裏付けるように、登攀の代わりに二日間、医学と地理学の講義が設けられている。医学の講義は、アメリカで医師免許を取得したシェルパ族の男性によっておこなわれる。午前中は人体の基礎構造や高山病など関する講義をおこない、午後からは応急処置の実習となる。地理学の授業は、アメリカの大学教授であるという米国人講師と、ネパール人の助手によってなされる。こちらも午前中は地図の見方やコンパスの使用法などの座学をおこない、午後からは外に出て実際の風景を見ながら、方角の測定や地形の観察などをおこなっていた。

表3：一日の時間割

6:30～7:30	英会話クラス
7:30～8:00	朝食
8:15	集合
(一時間程度の移動後、訓練開始)	
17:15	訓練終了
18:15	夕食
19:00～20:00	講義（隔日）

表3は一日の時間割である。毎日早朝には英会話のクラスが開かれ、全員参加が求められる<sup>8)</sup>。英会話は、



看護婦や教師として働いている村出身の女性たちが交代で担当する。テーマはガイドの仕事に直結するものが設定され、授業も教材やゲームを通して生徒同士で実際の会話することに重点をおいたものであった。

また夜は一日おきに、本部となっているロッジの大部屋で全員参加の講義がおこなわれる。夜の講義はアメリカ人講師が担当し、シートを張った簡易スクリーンに欧米の登山家向けに製作された映像を30分ほど見せてから、随時質疑を交えつつ講話という形式で進められていた。

最終日の前日には試験がおこなわれ、アイス・クライミングのほか、応急処置の実技や地理学の口頭試問もおこなわれた。最終日には卒業のセレモニーが開催され、各班から優秀者が表彰される。

こうした登山学校でなされているのは、単純な登山技術の伝授にはとどまらない。様々な立場の人々が共同していわば「シェルパ」を作りだしているのであり、その過程には登山用具などのモノを用いて山の環境を対象化し、そこに道を作りだしてゆく実践が結びついている。次章では、様々な「シェルパ」の理念および環境の対象化という二点に注目して登山学校の風景を記述し、いかに「シェルパ」が作りだされてゆくかについて分析を試みる。

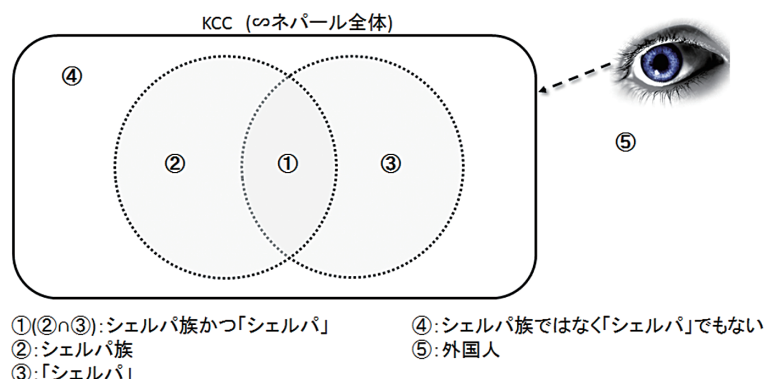
#### 4. コンタクト・ゾーンとしての登山学校

本章では、登山学校およびP村における具体的な語りと実践を分析する。第1節では「シェルパ」をめぐる語りを取り上げる。第2節では登山学校における訓練を、環境を対象化する実践として捉えて記述してゆく。

##### 4.1 シェルパをめぐる語り

KCCに関与する人々は、図式的には5つの立場に分類できる。①外国人、②シェルパ族かつ「シェルパ」として働く人々、③シェルパ族だが「シェルパ」ではない人々、④シェルパ族ではないが「シェルパ」として山で働く人々、⑤シェルパ族でも「シェルパ」でもない人々(本事例ではネパール人スタッフにあたる)である。これは、ネパール全体の縮図とみなすこともできる(図2)。

図2:「シェルパ」をめぐる概念図



便宜的に本節ではこの分類に従い、それぞれの立場から表明される「シェルパ」の枠組みや理念について記述する。

### ①外国人

ある夜の講義は、若いアメリカ人登山家による雪崩についてのレクチャーであった。部屋の壁にはシートで簡易スクリーンが設えられ、アメリカ製の映像教材が上映された。「雪崩に会ったときにシェルパとしてなすべきことは、冷静であること、ガッツを保つことだ」。上映が終わると講師は身振りを交えつつ、聴衆を煽るように抑揚をつけて雪崩の恐ろしさや救助技術の重要性について語る。彼のパフォーマンスに生徒たちは力強く承認の合いの手を入れていた。(2013年1月27日フィールドノート)

2013年の地理学の講義は、米国人講師とネパール人のアシスタントによっておこなわれた。地図の読み方や石の種類の見分け方、温暖化による氷河の減少などを説明した一連の講義のまとめとして米国人講師は言う、「英語を学びなさい。そしてシェルパとして、山とそこで起きていることを登山客たちに教えなさい」。(2013年1月28日フィールドノート)

こうした場面でなされる言明には、外国人によって想像された「シェルパ」のあるべき姿が提示されている。彼らは多様な出自からなる生徒たちを「シェルパ」として名指し、山におけるたくましさや豊富な知識といった理念を生徒たちへと伝達する。

2014年は学校にドキュメンタリー映画の撮影隊が入ることになり、ある日のインストラクター・ミーティングでは米国人スタッフの一人から村の生活への影響を懸念する声が上がった。その際、登山学校のディレクターを務める人物は「僕は山に登るから、シェルパの気持ちはよくわかる」と述べ、その上で「できる限りの配慮をする」旨をネパール人インストラクターたちに対して説明した。ここでカメラが影響するとされる村の生活の担い手が登山に関わらないシェルパ族であり、少なくとも出席している出自の様々なインストラクターたちでないのは明白であるにもかかわらず、発言者のなかでシェルパ族と職業としての「シェルパ」は暗黙の裡に同一視されており、当事者不在のまますべからず登山家の意識を持つべきものとされた<sup>9)</sup>。シェルパ族とは「シェルパ」であり、山に行く人々でなければならないのである。

これは登山家に限らず、一般の外国人観光客もまた「シェルパ」について同様のイメージを抱いて山を訪れる。次は登山学校の事例ではないが、参考のため一般のトレッキング客へのインタビューから引用する。

「最初は彼、自分はシェルパだって言ってたんですよ。トレッキングの途中でシェルパ族じゃないってわかって、それでやっぱりシェルパじゃなくて大丈夫なのかなって、不安にはなりました」(日本人・20代男性・観光客)

ここでもグルン族のガイドは「シェルパ」を名乗っており、一方の観光客にとってはガイドすなわちシ

エルパ族であり山に詳しいものという想定が存在する。ガイド氏の言い分としては、「別に隠していたわけではないし、自分の仕事が「シェルパ」なのは間違いないから」というものであった。外国人たちのあいだでは、誰が「シェルパ」であるかについては微妙な差異を湛えつつも、山で働くネパール人を漠然と「シェルパ」と呼びならわすことが多く、同時にシェルパ族が民族であるということも認識している。換言するならば、「シェルパ」、シェルパ族および山でガイドするネパール人のあいだにゆるやかな等式が想定されており、この曖昧さを利用するような形で、ネパールの人々によって「シェルパ」という名乗りがおこなわれているのである。

なおネパールの観光業界の内部では「シェルパ」という言葉は、トレッキング・ガイドのアシスタントを指す一方で、高山におけるポーターやガイドを指すものとしても用いられている。前者が小間使的な駆け出しの仕事であるのに対して、後者はネパールでも指折りの高給職である。この用語の混乱もまた「シェルパ」の多義性の一因となっている<sup>10)</sup>。

では当のネパールの人々は「シェルパ」というカテゴリについてどのように考えているのだろうか。以下では登山学校の面々と、P村の人々による語りを取り上げてゆく。

## ②シェルパ族かつ「シェルパ」

まずはシェルパ族であり、かつ職業もまた万人の認める「シェルパ」、登山ガイドである人々の語りである。

ある夕方、我々は宿泊所となっているロッジの食堂で雑談をしていた。筆者は前日の講義で講師が「シェルパ」を仕事として扱っていたことについて意見を求める。すると、ちょうど部屋に入ってきて話題を聞きつけたシェルパ族の青年が言う。「あーまたその話か、外国人と話すといつもその話になる。君はシェルパなの？　じゃあポーターなんだねって。シェルパ族がみんなポーターじゃないことを説明するのには骨が折れるよ。「シェルパ」って言葉は登山の仕事だけに制限するべきだね」(シェルパ族・20代男性・トレッキング会社経営)。

彼はカトマンズの大学を卒業した後、トレッキング会社を家族と共同経営するかたわらで語学学校のフランス語教師も務める、いわばエリートである。彼の場合は、職業としての「シェルパ」という枠組み自体を否定しているわけではない。むしろ、「シェルパ」をポーターという「低い」仕事と同一視されることに對して憤りを感じている。

次の事例はある日のP村での場面である。

その日、村には西洋人のトレッキング客が訪れていた。彼は村の若者がエベレストに行ったという話を聞き、「山にはポーターとして行くの？」と何気なく尋ねる。すると若者はその西洋人に対して強い口調で、「山で働く人たちのことはポーターじゃなくてシェルパって呼ぶんだ、一緒にしたらみんな怒るぜ!」と言い返した(シェルパ族・20代男性・登山)。

彼もまた、山に登る人たちはすべてみな「シェルパ」だという。筆者が、民族が違っても「シェルパ」なのかと尋ねると、タマンならタマン・シェルパ、チェットリならチェットリ・シェルパであると説明した。

一方で、数度のエベレスト登頂を果たし現在もP村に居住する男性はこう語る。「私たちは貧しいから山に行くしかなかった。最近の「新しいシェルパ（ニュー・シェルパ）」たちは賢い。教育もあつて色々な言葉を話せるから、「シェルパ」だといってトレッキングや山の仕事を始める」（シェルパ族・40代男性・登山）

シェルパ族の登山家たちは、しばしば「シェルパ」という職業についての誇りを口にする。その一方で同時に、「シェルパ」の名が独り歩きして拡大を続けることへの違和感もまた表明されるのである。

### ③シェルパ族であるが「シェルパ」ではない人々

続いて、登山の仕事をしないシェルパ族の人々の語る「シェルパ」について見る。

南部のソル地方からやってきたシェルパ族の生徒は言う、「僕はエベレストに登りたい。トレッキング・ガイドをしてたんじゃ、ただのローカル・シェルパさ」（シェルパ族・20代男性・トレッキング）。彼の語りからは、シェルパ族として生まれることは「本物のシェルパ」としての十分条件ではなく、「シェルパ」とはトレーニングを積むことでなつてゆくものであるとの認識がうかがえる。

一方、村でロッジを営む女性によれば、「山で道案内（バト・デカウネ）をする人はみんなシェルパ、だけど私たちとは別物のシェルパ」（シェルパ族・40代女性・ロッジ経営）である。彼女の場合も「シェルパ」というカテゴリーの存在を認めており、その定義は先の若者よりも広くトレッキング・ガイドも含むものとされている。その一方で、職業を「シェルパ」と呼ぶのは、本当は間違いであると言い、「本物のシェルパ」の位置づけが逆になっている。ただし、彼女の言う「純粋なシェルパ（ピュア・シェルパ）」は、ナムチェより上の地域に住むシェルパ族のみであるとされる。ここではシェルパ族の境界もまた必ずしも明確ではない<sup>11)</sup>。

シェルパ族と「シェルパ」のあいだの混同の原因について尋ねると、必ずテンジン・ノルゲイの名が引き合いに出される。テンジン以前にはシェルパ族という言葉すらなかったとも語られる<sup>12)</sup>。登山学校に参加していた村出身の生徒は以下のように説明する。「サルキヤカミ<sup>13)</sup>を知っているかい？ テンジンがシェルパだと言ってエベレストに登ったから、僕らシェルパも彼らみたいに職業だと思われたんだ」（シェルパ族・20代男性・学生）。彼はシェルパ族を職業カーストになぞらえることで、ある種の違和感を表明している。しかしながらこの誤解は必ずしも解かれるべきものではない、別な村人が「他の人たちがシェルパを名乗るのは、僕たちにとっても良いことだと思う、世界中で有名になるし」（シェルパ族・20代男性・ヤク飼育）と語るように、肯定的にも捉えられている。

一般的にシェルパ族の人々の間では、トレッキングや登山の仕事をネパール人を「シェルパ」と呼ぶこと自体は、「本当は間違いである」と前置きをしつつも、枠組みの存在自体は承認されており、そこには両義的な意味合いが付与されている。また誰を「シェルパ」とみなすかは個人によって見解が異なっており、登山ガイドはおおむね「シェルパ」とみなされる一方、トレッキング・ガイドは「シェルパ」で

はないとされることも多い<sup>14)</sup>。またトレッキング・ポーターについては「クッリ（ポーター）<sup>15)</sup>はシェルパではない」として明確に否定される。

#### ④「シェルパ」として働くシェルパ族ではない人々

一方で、シェルパ族ではない「シェルパ」たちは、「シェルパ」をどのようにとらえているのだろうか。カトマンズから登山学校に参加したある男性は「シェルパと呼ばれることはうれしいよ」と言い、「それが僕の仕事だからね」と付け加えた（バウン・20代男性・登山）。彼はネパールでは最高位のカースト、バウンに属する若者であり、海外留学の資金を稼ぐため、大学には通わずに山の仕事をしていると語る。一般的にネパールのカースト制度では、チベット系の人々は低位であるとされる。しかし彼の場合は「シェルパ」を仕事として認識し、あるいは民族とは異なるそのカテゴリゆえにこそ「シェルパ」と自己の同一視を望ましいとさえ言う。

別の生徒であるタマンの男性は、自分がしばしば「シェルパ」と呼ばれることを認めたうえで、「でも僕は、改めて聞かれたらシェルパだとは答えないな。だって僕はタマンだからね」と述べた（タマン族・20代男性・トレッキング／登山）。彼の場合は「シェルパ」という枠組みの存在と、自分がその指示対象となりうることを認めながらも、自らそれを名乗ることはないと言い、民族が違うから言いたくないのだと説明する。また別な生徒も言う、「僕は、本当はシェルパじゃないよ。だけど客の前ではシェルパになる（become Sherpa）んだ」（マガル族・20代男性・トレッキング／登山）。

人によっては、「シェルパだと言えば外国人はすぐにOKというから仕事をしやすい」という説明もなされる。別な機会にカトマンズでインタビューしたトレッキング会社経営の男性は、目の前にいたスタッフを指さして「彼も本当は違う民族だけどトレッキングの時にはシェルパだと言うんだ」と特に悪びれる様子もなく教えてくれた。

シェルパ族の人々が「シェルパ」に対してアンビバレントな感情を抱いていたように、シェルパ族ではない人たちも両義的な感情を抱きつつ、道具的に自らを「シェルパ」としてアイデンティファイしてゆくのである。

#### ⑤シェルパ族ではなく「シェルパ」でもない人々

ネパール人の大部分は当然、シェルパ族でも「シェルパ」でもない。ここでは登山学校に関わる少数の人々の語りについてのみ取り上げる。

2014年に地理学の講義で講師を務めていたネワール族の男性は、生徒たちに「OEDにのっている「シェルパ」の意味を知っているか？」と問いかけ、それはポーターだと解説する。彼は「客に何かを聞かれてもわかりませんと言ってスタスタ歩いて行ったんではダメだ、様々な知識を身につけて、シェルパの定義をガイドとして確立しなくてはならない」と主張し、「シェルパの仕事とは道を見つける（バト・コジュネ）こと、道を作る（バト・バナウネ）ことだ」と説く（ネワール族・30代男性・会社経営）。シェルパ族でも「シェルパ」でもない彼の場合、多様な出自からなる生徒たちを一括して「シェルパ」と呼ぶことは注意深く



避けつつ、「シェルパ」とは学習を通して成ってゆくものであり、その枠組みもまた変化しつつあるもの、変化させることが可能なものであると認識している

学校にはトレーニングと趣味を兼ねてきたと語るカトマンズ出身のチェットリの男性も、「ガイドのことをシェルパと呼ぶのは、本当は間違い」と前置きしつつ、「状況は変わっており、いまにそれも正しいということになるだろう」と述べる（チェットリ・30代男性・テレビ局勤務）。

部外者のネパール人にとっては、「シェルパ」という仕事に対する両義的な感情は少なく、その枠組みはまさに生成変化しつつあるものと捉えられているのである。

ここまでをまとめるならば、外国人たちはシェルパ族と職業としての「シェルパ」、そして登山家を暗黙の裡に同一視し、その前提のもとに各々の抱く「シェルパ」の理念を開陳してゆく。一方のネパール人のあいだでは、職業を指す「シェルパ」は「本当は間違い」とされつつも、その枠組みの存在自体は認識され、境界線がそれぞれの立ち位置から交渉されていた。そして外からも内からも両義的な感情が抱かれつつ、道具的に「シェルパ」へとアイデンティファイしている。

登山学校とは、こうして複数の「シェルパ」が交渉される場である。外延が議論される一方で、そこには「山で道案内する人」、「山をよく知る者」という「シェルパ」の内包、すなわち中核となるイメージも存在している。また「シェルパ」とは生得的なものではなく、トレーニングを積んで「なる」ものとも考えられていた。それでは、どのようにして人は「シェルパ」となるのか。次節では「シェルパ」を、登山学校において提示される登山ガイド像に絞り、具体的な学校の場面を取り上げつつ検討してゆく。

## 4.2 環境を対象化する

本節では登山学校の訓練を、生活環境を対象化してゆく実践ととらえて分析する。国立公園の設置などによって自然保護言説が強制され、西洋式の自然／文化の二項対立図式が押し付けられる事例は数多く報告されてきた[West et.al. 2006]。KCCの事例でも、生徒たちは自分たちがこれまで生活してきた山の環境を対象化することが求められ、従来は感覚的に把握されてきた世界を言語化、数値化することが求められる。結論を先取りするならば、ガイドとして環境中に顧客と共有できる道を作り出すことが要求されるのである。

2014年1月28日のトレーニングはクライミングではなく、観光客を案内するという設定でのロールプレイであった。生徒たちには、村の裏山へと登る旨が前日にインストラクターより伝達された。同行することにした私は当日の朝、P村の友人に何が要るかを尋ね、ヘルメットが必要かと確認すると、彼は「いらないよ、すぐそこだから」と言う。やがて斜面を登って岩場へとたどり着き、米国人講師がヘルメットを着用するように指示すると、ここで私と友人、および村出身の生徒もう一名はヘルメットを持参していないことが判明する。講師は生徒たちにどのように対処すべきかを議論させ、結論は引き返すというものであった。帰路、友人は終始無言であった。（2013年1月28日フィールドノート）

この事例では、村人にとって日々のヤクの放牧地であり、装備が必要とは考えもしなかった場所が、危険に満ちた山という外部からの認識と衝突する。そして教育という場の権力関係により、すぐさま外部者側の認識へと一本化された。登山学校ではそれまでの生活世界を問い直し、観光客の身体に合わせて世界を再形成することが要請されるのである。

次は、アメリカで教育を受けて医師となったシェルパ族男性が担当していた医学の講義の一部である。

授業が開始されると、まず講師は都市 (urban) と未開 (wilderness) の違いとは何かを生徒たちに問い、自動車の有無や病院の有無といった回答をホワイトボードに書き取ってゆく。そして、未開の世界とは人間と自然が対決する状況であり、生き延びるためには道具やスキルが必要であると説く。この導入を経て、彼は体温計や応急処置キットなどの使い方を教えていった。初めは口数少なく講義を聞いていた生徒たちも、取り出された道具には強い興味を示し、数人は講義中も体温計を光にかざして眺めたり、水銀をあげては振り戻したりを繰り返していた。多くの生徒はこれまで体温計を見たことがなかったとのことで、それから数日、彼らは筆者の顔を見るたびに体調を尋ねるようになった。

(2013 年 1 月 25 日フィールドノート)

また、次は地理学の講義における一コマである。

午前中にロッジの食堂でおこなわれていた講義は、午後は野外実習となった。ヒマラヤの山塊を見渡せる峠道の上で、アメリカの地理学教授である講師が氷河の減少について説明をおこなっていた。氷河の減少に強い危機感を抱くという彼は、環境破壊と温暖化のせいでまもなくヒマラヤの氷河は消失するだろうと熱弁し、それをネパール人の助手が通訳してゆく。しかしながら生徒たちの反応は薄く、講師は「グリーンハウス・エフェクト」などのキーワードを説明して生徒たちに復唱させるものの、彼らはぼそぼそと呟きただけであった。そこで通訳を務めていたネパール人の助手が介入して米国人講師や筆者を指さし、冗談めかしながらも糾弾するような調子で「自動車産業!」「工業国日本!」「ヘリコプター・ツアー!」と説明を始めると生徒一同は大いに盛り上がる。彼は「われわれネパール人がすべきは、いま何が起きているかを学ぶことだ」と総括した。のちに講義の印象を尋ねると生徒の一人は、「今日の話は正直よくわからなかった。だけど自然を守るのが大事だということはわかったよ」と述べている。(2013 年 1 月 28 日フィールドノート)

上の二つの事例では、講義の中でいわゆる自然／文化式の世界観や環境保護言説が扶植されている。ここでは体温計などの道具や、携帯電話や車などを通して想像される工業国イメージを媒介に翻訳され、それまでの生活世界が対象化されてゆく。

ガイドとして山で道案内をするために、生徒たちはこのように山の世界を対象化することが求められて

いた。しかし、山において道は常にそこにあるわけではなく、絶えず見つけだしてゆかねばならない。「シェルパ」の定義をめぐる地理学講師の語りのなかにもあった通り、「シェルパ」たちは環境中に道を作りだし、それを顧客と共有しなくてはならないのである。

地理の授業では地図の読み取りも教育される。通常ネパール山間部の人々は、地名と地形的特徴のシーケンスによって経路を把握しており、距離は時間・日単位で感覚的に認識される。自分の位置は主要な山や村の見え方によって推定される。そのため、筆者が観察した2回の授業16名の生徒のうち、ガイドとして経験を積んでいる者も含めて、講義開始時点で地図を読むことができる者は一人もおらず、最寄りの飛行場から村までの距離を問われて「500km！」等と答える場面も珍しくなかった。顧客とルートを共有するためには彼らが感覚的に把握していた道を、方角とメートル法に基づいて数値化しなくてはならない。

そしてまた、登山学校の主たる訓練であるアイス・クライミングがそもそも道を作るためのものであった。ここではクランボンやアイスアックスなど用具の使い方を学んで、それまでは壁であったところに道を見つけ出し、作りだしてゆかねばならない。実際に彼ら自身も、氷壁や山中にフィックスト・ロープを張ることを、ネパール語で「道を作る（バト・バナウネ）」と表現するのである。

このような講義や実践を通して、生徒たちは自分たちの生活環境であった山を対象化し、数値化、言語化することが求められる。そして「道案内をするもの」として、顧客と共有できる道を見出し、作り出すことが要請されるのである。これらの事例では、確かに自然は人間とは異なる領域に位置づけられ、ときに人間と対立する二項対立的な自然観が生徒たちへと伝達されている。ただしこうした観念は、講義を通じて既存の環境把握と直接的に置き換えられるのではない。あるときは体温計やコンパスなどのガジェットを介して数値化することで、また工業製品や想像上の工業国を媒介に他者の視点を認識することで、あるいは英語による言語化を求められることで生活世界は対象化され、おそらく講師たちが意図するのはまた異なった形で翻訳されてゆく。道具を用いて生活世界を対象化し、他者と共有可能な道を作り出す実践。この過程においてこそ「山を知悉し」、「道案内するもの」、すなわち職業としての「シェルパ」が立ち現れてくるのである。

## 5. 結論

ここまでみてきた通り登山学校では、外国人、シェルパ族、および「シェルパ」とそれら内部の様々な立場から、職業としての「シェルパ」をめぐる異なる見解が提示され、境界や理念が交渉されていた。そこには共通認識として、「本当は間違い」だが「山を知悉した」「道案内する人」の像が存在している。生徒たちは登山ガイドとして、それまでの生活空間であった山地の環境を、道具やイメージを用いて客観化・数値化・言語化し、顧客と共有可能な道を作り出すことが要請されていた。トレーニング開始当初は、氷瀑の上までたどり着けずに途中降下していた生徒たちも、いかにして手足を協調させ、アイスアックスやクランボンを効果的に氷へ打ち込むかを次第に学んでゆき、二週間が経過するころには軽々と登攀を成功させるようになる。彼らが登山ガイドへと移行するこの過程は、事例中の医師が述べたようにスキルや

道具を用いて自然を対象化し、それと格闘することであった。この実践においてこそ、職業としての「シェルパ」が生成し、再生産されている。

「シェルパ」は二つの意味でハイブリッドな集団である。一つには、「シェルパ」がネパールの多様な民族の人々から成り立つ範疇であるということ。登山学校では「シェルパ」の理念が提示され、様々な立場の人々が「シェルパ」へと接近してゆく。

第二に、「シェルパ」は人間のあいだの関係のみにおいて生じるわけではないこと。米国人の「シェルパ」観や自然観は、道具やイメージによって媒介されて生徒たちの内面へと翻訳されていた。職業としての「シェルパ」になるには、登山用具を用いて氷壁や崖に道を作り出し、それを顧客と共有する能力が必須である。「シェルパ」はモノや概念、実践のネットワークを通して生成するのである。

先述の通り、人間集団の分類がその集団についての知を本質化し、その知が再び分類作用へ影響するという循環的なメカニズムを、イアン・ハッキングはルーピング・エフェクトという概念を用いて説明した[Hacking 1995]。「シェルパ」において生じているのも、同様の本質化と分類の相互作用的な変化である。従来は民族を指示していた「シェルパ」の語が、登山と観光の歴史の中で高地ポーターを指すものとなり、現在は「道案内するもの」として本質化される。

さらにハッキングによれば、変化を続ける集団において個人は、その時点での知に基づいて過去を語り直し、過去を再編成する。これは職業としての「シェルパ」をめぐる一見すると矛盾した言明についての説明ともなる。たとえば、テンジン・ノルゲイ以前は「シェルパ族」という言い方も無かったという語りに対して、ではテンジンはシェルパ族ではなかったのかと問い返すと、いや彼は「シェルパ」だったと言う。彼らの認識論的な事実、現在の知から語りなおされている。これはシェルパ族そのものもまた登山の中で生じてきたことを示唆している。

さらに「シェルパ」の事例では、シェルパ族と職業としての「シェルパ」の両カテゴリ間でも本質化された知がフィードバックしている。「シェルパ族と「シェルパ」は別物である」と語る人物が、同時に「僕はシェルパ族だから山に行かなくてはならない」と主張し、また逆に「僕はヒンドゥだから」と言う人物が、シェルパ族の慣習に従って山を歩き、仏教徒のプジャを開催するのである。

こうして、シェルパ族と「シェルパ」の二つのカテゴリは、通時的・共時的に二つの焦点をめぐる脈動しながら変化を続けており、一連の過程では常に境界や理念をめぐる交渉がおこなわれている。こうした現象は本稿の事例に限らず、実際の登山やトレッキングの場面において、またネパール国内あるいは世界を流通する観光案内や「シェルパ」の名を冠した商品を介して、いたるところでなされていることだろう。本稿で提示したのは、登山学校という一つの具体的な事例である。

## 謝辞

本稿が依拠する現地調査は、卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」・大学院生調査研究助成(平成24年度)、公益信託澁澤民族学振興基金・大学院生等に対する研究活動助成(平成25年度)、および日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号26・1306)によって可能となっ

た。ここに記して感謝の意を表します。

## 注

- 1) 本稿では、「民族」としてのシェルパを指す場合はシェルパ族と表記し、職業としてのシェルパを指す場合は括弧付きで「シェルパ」と記述する。ただし、目指すのは厳密な分類ではなく、曖昧さはらんだ人々の語りに沿った形でその認識をとらえることである。また語りの引用のなかで、民族あるいは職業を明示せずにシェルパの語が用いられた場合は、両者を区別せずにそのままシェルパと表記する。ネパールにおける「民族」概念については様々な議論があるものの、紙幅の関係上本稿では論じられない。「シェルパ族」とは、「かつてチベットから来て、仏教を信仰し、シェルパ語を話すわれわれ」などとして自己言及される社会的範疇を指すための便宜的な語である。
- 2) 2011 年のセンサス上の人口は 112,946 人である。ただし鹿野は、1991 年のセンサスに基づいて民族誌的知見と統計における民族分布の違いを指摘し、シェルパの持つ積極的なイメージから、センサスの場においてシェルパを自称する人々が多く存在すると分析している。鹿野の推計によれば本来のシェルパ族の人口は、1970 年時点で国外居住者を含めて約 2 万人程度とされる [鹿野 1999; 2001: 256-259]。
- 3) サガルマータ国立公園への外国人入場者数は、2012 年は 36,518 名であった [Government of Nepal 2013]。
- 4) KCC ミッションステートメント (<http://www.alexlowe.org/kcs.shtml> 2014/9/27 閲覧)
- 5) トレッキング・ガイドの日給がおおよそ 1000 ルピーから 2000 ルピー程度 (1 ルピー≒1 円) であり、経験豊かつ特殊な言語を身につけている場合には一日 100 ドル近く稼ぐ者も存在するとされる。
- 6) マガル、ライ、グルン、タマンはそれぞれネパールの山間部に居住する民族集団。パウンはネパールにおいて最上位カーストとされる人々、チェットリはパウンの次に位置するカーストである。ラマはチベット語で僧侶を意味し、チベット系の人々が姓としてしばしば用いる。
- 7) 表からは省略したが、タマンの一名を含めて全員がシェルパ語とネパール語を話す。目に留まるアラビア語とマレー語およびイタリア語については、アラビア語話者はクウェートへ一年間の出稼ぎに行っていた際に習得したものであり、後の二つはそれぞれの話者を顧客とするトレッキング会社に所属しているためとのことであった。
- 8) 初日の面接で英語に堪能と判断された生徒はアシスタントとして授業に参加する。
- 9) 実際には KCC が始まったことを理由に、この村ではチベット仏教の新年祭であるロサルがおこなわれなくなっており、いささか傲慢な印象はぬぐえなかった。
- 10) 通常の会話ではどちらも「シェルパ」として言及される。特に区別の必要がある場合、前者はトレッキング・シェルパ、後者はクライミング・シェルパと呼ばれる。さらにクライミング・シェルパは職務上、荷物を運びあげるレギュラー・シェルパと、外国人とパートナーを組むプライベート・シェルパに分かれる。
- 11) フューラー＝ハイメンドルフは、シェルパ族の間ではネパールへの移住時期の古さを基準とした同心円状にシェルパの真正さが想像されていると指摘する [Füer-Haimendorf 1964]。しかし、少なくとも筆者の調査時にはこうした語りは聞かれず、本文中で述べたように山への強さを基準として「本物のシェルパ」が語られていた。
- 12) これは、シェルパ族という集団そのものも登山と観光の中で形成されてきたことを示唆している。紙幅の関係上、この点は別稿にゆずりたい。
- 13) どちらも不可触民とされる職業カースト。カミは鍛冶屋を、サルキは皮革業を生業としてきた。
- 14) 彼らは「DNA が違う」、「心臓が違う」などと説明される。
- 15) クリはポーターの蔑称として用いられ、トレッキング・ポーターと一般のポーター両者に対して使われる。

## 参考文献

Adams, Vincanne

1996 *Tigers of the Snow and Other Virtual Sherpas*. Princeton: Princeton University Press.



1997 Dreams of a Final Sherpa. *American Anthropologist* 99(1): 85-98.

Brower, Barbara

1991 *Sherpa of Khumbu: People, livestock, and landscape*. New Delhi: Oxford University Press.

Fisher, James F. 1990 *Sherpas*. New Delhi: Oxford University Press

Fürer-Haimendorf, C. von

1964 *The Sherpas of Nepal: Buddhist Highlanders*. Berkley and Los Angels: University of California Press.

1975 *Himalayan Traders: Life in Highland Nepal*. New Delhi: Time Books International.

1984 *The Sherpas Transformed: Social Change in a Buddhist Society of Nepal*. New Delhi: Sterling Publishers.

Government of Nepal

2012 *National Population and Housing Census 2011*. Central Bureau of Statistics, Kathmandu, Nepal

2013 *NEPAL TOURISM STATISTICS 2012*. Ministry of Culture, Tourism & Civil Aviation, Planning & Evaluation Division, Statistical Section, Singha Durbar, Kathmandu.

Hacking, Ian

1995 The Looping Effects of human kinds. In Sperber et al.(ed.) *Causal Cognition*. New York: Oxford University Press. pp:351-383.

飯島茂

1982『ヒマラヤの彼方から：ネパールの商業民族タカリー生活誌』日本放送出版協会

鹿野勝彦

1999「「シェルパ」とはだれのことか——シェルパ化とその背景」『金沢大学文学部論集・行動科学・哲学篇』19: 61-82.

2001『シェルパ ヒマラヤ高地民族の二〇世紀』茗溪堂

ラトゥール、ブルーノ

2008『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』川村久美子（訳）新評論

レイヴ、ジーン&エティエンヌ・ウェンガー

1993『状況に埋め込まれた学習』佐伯胖（訳）産業図書

Lim, Francis Khek Gee

2007 Hotels as Sites of Power: Tourism, Status, and Politics in Nepal Himalaya. *Journnl of the Royal Anthropological Institute* N.S., 13: 721-738.

根深誠

1998『シェルパーヒマラヤの栄光と死』山と溪谷社

Ortner, Sherry

1978 *Sherpas through their Rituals*. Cambridge: Cambridge University Press.

1989 *High Religion: A Cultural and Political History of Sherpa Buddhism*. Princeton: Princeton University Press.

1999 *Life and Death on Mt. Everest*. Princeton: Princeton University Press.

Stevens, Stanley

1993 *Claiming the High ground*. California: University of California Press.

月原敏博

1992「チベット人の歴史的移動・定着に関する若干の考察」『ヒマラヤ学誌』3:62-72

West, Paige, James Igoe and Dan Brockington

2006 Parks and Peoples: The Social Impact of Protected Areas. *Annual Review of Anthropology* 35: 251-77.

## **Discourses and Practices of the "Sherpa": The Case of "P"-Village, Solukhumbu, Nepal**

Fukachi FURUKAWA

### **Summary:**

Solukhumbu District, located in Eastern Nepal, is the homeland of the Sherpa people. This area has Mt. Everest within its territory and has been developed into one of the most famous trekking/climbing places in the world. During the tourist season, more than 30,000 tourists come to the Solukhumbu District and Nepalese guides from various castes and ethnic groups escort them. Sometimes these Nepalese call themselves "Sherpa".

The purpose of this study is to analyze the occupational category "Sherpa", and in particular, to show how this category is talked about, practiced and reproduced, on the basis of observational data from a climbing school in "P"-Village, Solukhumbu. At this climbing school, students from all over Nepal are taught the techniques of ice-climbing and other climbing/guiding skills, under the guidance of American instructors. Students from the Sherpa ethnic group, people who work as "Sherpa", and foreign instructors manifest their own differing views and ideas of "Sherpa", and these views are negotiated in the process of training. So, to become "Sherpa", students need to objectify their mountainous life world and create ways sharable with their future customers. They will become molded into the occupational category "Sherpa" through notions of "Sherpa", things like climbing gear and the practice of making roads.

**Key Words :** Nepal, Sherpa, Mt. Everest, Climbing, Trekking

